

汝、殺す勿れ／律法の真の意味

主イエスは5章20節で「言うておくが、あなたがたの義が律法学者やファリサイ派の人々の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の国に入ることはできない」と言われたが、次につづく箇所、神が与えられた一つ一つの律法の意図を正しく理解し、それに従って正しく生きるキリスト者の義について、六つの具体例をあげて、それを説明される。ここには一つの際立った特徴が見られる。すなわち「～と言われていたことは、あなたがたの聞いているところである。しかし、わたしはあなたがたに言う」という力強い表現である（口語訳／21、27、31、33、38、44節）。

よく誤解されているのであるが、主はここで、旧約の律法の教えとご自身の教えを対称させて、新しい教えを群衆に教えたのではない。主は、すぐ前の箇所で「わたしが来たのは律法や預言書を廃止するためだ、と思ってはならない。廃止するためではなく、完成するためである」といわれたばかりである。主はここで、律法の真の意図と目的を歪曲していた当時の律法学者・ファリサイ派の人々の律法解釈、すなわち、律法の文字に拘泥し、それを形式的に守ることによって神の前に義とされる、と考える律法主義的形式主義の誤りを指摘し、神の律法の真の意味を教えているのである。

例えば「あなたは殺してはならない」という「十戒」の第6の戒めは、律法学者たちが言うように、ただ単に肉体的に人を傷つけ、殺すという外的行為のみを指すのではない。それは、他人に対する破壊的怒りの感情、相手をまぬげなしと呼ぶ傲慢な態度、バカ者とののしり、或いは批判する、そのような言葉と思いのすべての罪をも含むものであって、そのような心の奥における悪しき思いも、神の前には殺人の罪に等しい罪である、と主は言われたのである。

聖書の罪観は何と深く鋭いことか。それは外側の行為だけでなく、人間の心の内奥にまで迫る。外側の行為が、正直の手本のように見えても、内側のひそかな思いを神はさばかれる。主は他の箇所でこう言われた。「人から出て来るものこそ、人を汚す。中から、つまり人間の心から、悪い思いが出て来るからである。みだらな行ない、盗み、殺意、姦淫、貪欲、悪意、詐欺、好色、ねたみ、悪口、傲慢、無分別など、これらの悪はみな中から出て来て人を汚すのである」（マルコ7：20～23）。神の前における罪とは、単なる外的行為のみならず人間の本性深く関わっているのである。

罪は人間の本性に起因する。たとえ外から道徳的に完全だと思われる人がいたとしても、その心の中において、自分は一度も悪い思いをいだいたことがないと言い切る人は誰もいない。そういう意味で、人間はみな、神の前に罪を負った存在なのである。

隣人に対する愛のない怒りや憎しみ、人の人格を傷つける侮辱の言葉や心の思いさえ、殺人の罪に等しいという主イエスのご主張は、私たちのすべての誇りを打ち砕き、私たちが聖にして義なる神の前にひざまずかせるのである。こうして、神の律法（オキテ）は、人間の弱さ、愚かさ、罪深さをあらわにし、人間は律法を守ることによって義されず、神の前に義とされるのは、ただ神の恩寵によってのみであることを悟らせるのである。